

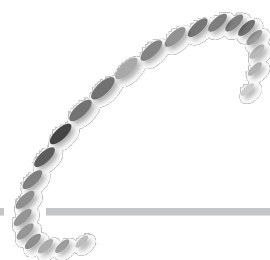
特別区議会議員講演会(平成27年度第2回)

少 子 化 対 策 の 可 能 性
－若者への支援をめぐる－
講 演 録

講師：中央大学文学部
教授 山田昌弘

日 時 平成27年12月1日(火)
場 所 東京区政会館20階会議室

公益財団法人 特別区協議会



目 次

	頁
講 演 録	1
質疑応答等	21

この講演録は、平成27年12月1日に行われた講演の
内容を集録したものです。

はじめに

こんにちは。本当に年末のお忙しい時期にお越しいただきまして、どうもありがとうございます。

今日は、「少子化対策の可能性―若者への支援をめぐる―」というお話をします。

先週、中央大学附属高校の保護者会で講演をしました。ゼミの学生にそれを言ったら、山田先生、あまり暗い話をしないでくださいね、社会学に学生が来なくなったら困りますから、というような話をしていましたけれども、そうなのです。私の話す内容はあまり明るくないのです。

私は学生から、生まれ変わったら将来何になりたいですか、と聞かれたので、役者とか作家とか、そういう人に夢と希望を与える仕事のほうがいい、と答えました。今、私は何をやっているかというと、人に危機感を与える仕事をやっているのです。というわけで、今日も人に危機感を与える仕事をします。

のちほど述べますが、学生に何と言っているかというと、ここに 100 人学生がいる、国立社会保障・人口問題研究所の予測だと、君たちのうち 25 人は一生結婚しません。残った 75 人は一度は結婚します。でも今、10 年以内に離婚する確率が大体 35%ですから 3 分の 1 として、75 人結婚したうち 25 人は 1 回は離婚する、と。結婚して、離婚しないで一生を送れる人は君たちの中で 2 人に 1 人しかいないのだよ、というように言って学生を暗くさせます。

保護者の人に対しては、皆さん方は大体お二人お子さんがいらっしゃると思います、1 人は結婚して離婚しない、でももう 1 人は結婚しないであなたのところにずっと居続けるか、離婚して戻ってくるかどうかですよ、というふうに言って危機感をあおっているのです。

今日も、そういった少子化対策の可能性についてお話ししますが、結局なかなかそう上手い手はないぞというようなことを 1 つ話します。

日本の少子化の本質

これは、一番最後に出そうと思っていたのですが、今日は特別に普段講演しない内容を付録としてつけました。レジュメ 58～60 頁の付録「日本の少子化の本質 日本の階級社会化」です。

多分、今の日本の少子化の背景にあるものは、はっきり言って階級社会化だと思います。よいか悪いかはともかくとして、階級社会化だと思います。1990 年頃までの日本社会は、大体中流社会と言ってよかったでしょう。ほとんどの若年男性の雇用が安定し、収入が増えていました。つまり、相手が中卒であろうが高卒であろうが大卒であろうが、男性と結婚すれば誰でも持ち家、自家用車、子どもを大学に入れて学費を払うぐらいの余裕が可能と思えた。だから、みんな結婚して子どもを 2 人ぐらい産めた、という社会が 1990 年頃まで続くわけです。しかし、1990 年以降、若者の経済

格差が拡大して、階級社会にどうも移行しつつあるのが今の日本社会だと思います。だから、安定した経済基盤を持つ若者と不安定な若者に今分裂しています。それが、段々年が経っていき、親が中流、でも子どもは下流に転落するかもしれないという恐れで、今、親も子どもの世代も不安を持っています。

つまり、少子化というのは下降移動を回避するための方策らしい、ということを最近私はいろいろところで言い始めています。結婚して親よりも貧乏になるかもしれない。女性にとって、父親は正社員、母親は専業主婦で家も買えた。でも、結婚相手として非正規男性しか残っていないとなると結婚した途端に生活水準が下がるし、さらに自分の子どもの生活水準も下がるかもしれない。

先週、NHKラジオでもこの話をしたので、もしかしたら聞いた方もいらっしゃるかもしれませんが、私がある未婚女性にインタビューをしたときに、「収入の高い男性でないと結婚したくない」と言うのです。「どうしてですか、やはり貧乏になるのは嫌ですか」と聞いたら、彼女は「私はいいいのだ」と。「私はいいいけれども、もし結婚して子どもを育てるときに私の子どもがかわいそうだ」と言っていました。「私の子どものころは、親は稽古事を習わしてくれたし、みんなと同じ短大まで出してくれた。でも、自分の子どもを育てたときに、お金がないから買えないとかお金がないから大学に行けないなんて言えない。言えないから、収入の高い男性と結婚しなければ結婚しない」、というふうにつまり下降移動を回避しているという感じなのです。

これも後で話しますが、最後にどうなるかのシナリオもまた示していきたいと思います。

今まで少子化において、お金と性関係を言うことが結構タブーでした。本の中にも書きましたけれども、私は20年ぐらい前から、結婚が少なくなっている背景にはお金の問題が絡んでいる、と言っています。ですが、あまり取り上げてくれなくて、実は収入が低い男性は結婚していないというデータを公表できるようになったのは、2000年に入ってからぐらいです。

昔、厚生省のある研究会でその結果等を発表したときに、当時厚生省の官僚が、学者さんはいいいなあ、もし私の立場でこういうことを発表したら私の首が飛ぶだろう、と言っていました。

学生に子どもを何人ぐらい欲しいか、毎年聞くようにしているのですがけれども、最近1人という回答が増えてきました。どうして、と聞くと、自分の父母は僕の学費を払うためにあらゆるものを節約して頑張っている。それを見ると、僕が就職して稼ぐぐらいの給料で子ども2人の学費なんて負担するのは無理だから、1人でなくてはと言うようになってきました。社会保障・人口問題研究所の既婚者調査で、理想の子どもの人数は、平均2.3とか2.4なのですがけれども、実際は1.9とか2人しか産めないと答えます。

そのギャップの理由は何かということ、子育てや教育費にお金がかかり過ぎるから、というのが20

年前から断トツの1位なのです。でも結局、政府は多分そこに触りたくないのです。そこを、子ども3人目は大学授業料の無料化などそれぐらいすれば3人産む人は結構いると思うのですが、そこは絶対触りたくないみたいです。

これも調査で確認しましたが、学歴が高くて子どもを大学に入れさせなければと思っている親ほど子どもの数が少なくなる。そういう親が増えてきているので、子どもの数が少なくなるという結果も出ているのですけれども、政府の方々はそこは触れてはほしくない。

もちろん、待機児童問題も絶対重要なことですし、不妊治療にお金を出すことも重要ですけども、それで出生率が1.8に戻るわけではないだろうと周りに語ってはいます。ですが、なかなかその辺を構造的に変えるのは難しいかもしれないです。

結婚・交際する人の減少

性関係がなければ子どもは生まれないわけで、海外で講演をするときは、マリア様でないのですから性的な関係を結ぶ相手がいなければ子どもは生まれませんよ、というふうに強調しています。しかし、今日本で起きていることは①(結婚する人、している人の減少)も起きていますが、実は②(独身者で交際している人がいる人の減少)も起きているのです。

結婚する人、している人の減少は、いろいろなところで見聞きしていると思います。先ほどちょっと飛ばしてしまいましたが、少子化の原因は基本的には結婚の減少にあるし、したくてもできない。若者をめぐる環境が激変しているのに意識はなかなか変わらない、というところが大きいというのはありました。

2010年の30代前半の未婚率が男性47.3%、女性34.5%です。今年の国勢調査の速報値が出るのが、大体来年の春ぐらいだと思います。私は印象として、30代前半はそんなに変わらないかなという気はしています。ですが、30代後半は、2010年男性35.6%、女性23.1%ですけども、さらに増えていくと思います。

それだけではなくて、独身者で交際している人も減少しているのです。若い人の恋人あり率というのが低下してきています。今の若い人はもう自由に恋愛しているのだろう、という感じを持つかもしれませんが、恋人あり率は男性25%、女性35%にしかすぎません。欧米は、確かに同棲(cohabitation)率が高くて、結婚前に同棲するのが普通です。つまり男女交際がすごく活発で、未婚で生まれる子は北欧やフランスでは5割以上です。

日本は、結婚も同棲も男女交際もどんどん低調になっているというか、男女交際というものの自体が若者からだんだん失われているというのが現状です。今、同棲率は2%未満で、2010年の段階で

1.6%と減少中です。未婚の人で同棲中と答える人はどんどん減っていています。未婚で生まれる子が2%ですが、戦前はすごく多かったのです。戦前は、1割、2割は未婚で生まれる子がいたのですが、今は本当に少なくなっている社会になりました。次の図は年齢別未婚率の推移で、結婚しない人がどんどん増えています。

これが、恋人あり率、交際中異性の友人あり率です。恋人あり率はそんなに変化していなくて、結婚していない男性の大体4人に1人恋人がいる、女性は3人に1人はいる、というのは変わっていないのですが、異性の友人がいるという人たちが激減しています。つまり、2010年の段階で、未婚男性の3分の2、未婚女性の2分の1以上は一緒にご飯を食べる異性の友人もいないということなのです。それだけ交際が低下しています。

交際の経過というのは50年の間でいろいろなデータが出てきていて、これが日本性教育協会が調査した性交経験率の推移です。細かい数字は配付資料でお確かめいただければいいと思うのですが、大学生は2005年をピークに、高校生は特に男性ですけれども、1999年をピークに性的体験率はだんだん減少しています。これを欧米の人に見せると、みんなびっくりします。女性もそうですが、日本の男性は性欲がないのか、と。最近なくなっているのです。

これが、2015年に内閣府が実施した調査報告書です。20歳から39歳独身者のうち恋人がある人の割合は35.6%、恋人がいない人が40.8%、一度も恋人がいたことがない人が23.3%です。私は2010年の調査で主査を務めたのですけれども、そのときとそれほど変わっていません。これはほとんど統計的な誤差の範囲内ですが、恋人がいない独身者に恋人が欲しいかと聞いたら、男性は61.5%、女性は60.1%。つまり、恋人がいない5人に2人は恋人は要らないと言っているわけです。

それも、結構経済力で大きく差がついていて、男性だと年収400万円以上と未満で大きな差があり、女性だと200万以上、正社員かそうでないかですごい差がある。2010年に調査したときは、男性67.3%、女性70.3%ですが、ここ5年の間で、恋人が欲しいという恋人がいない独身者の割合が10ポイント低下した。これは多分統計的に有意な数字で、2010年から2015年の間にさらに若い人の交際意欲は低下しているのです。

そもそも出会いの場がないという人も多いですし、男性も3分の1ですけれども、恋愛感情とか相手からアプローチがあればとか、交際すると結婚を考えると、受け身的なのが多いし、恋愛は面倒だと感じる人もいます。

これは、日本家族計画協会が大体2年に1度行っている調査で、2008年と2014年で比較してみたものです。セックスをすることに関心がないプラス嫌悪している、嫌悪しているというのはそんなにパーセントは多くないので、関心がないと答えている人はどれぐらいかということ、家族計画協

会のサンプリングがちょっと少ないので、実はあまり数字としては正確ではないなというふうに思っていました。ですが、ここまで大きな差が出てしまうと若い人におけるセックスに対する関心の低下というのは明らかだと思います。16歳から19歳で2008年には男性7.5%だったのが、2014年の調査で34.0%、3分の1がセックスすることに関心がないとなってしまう現実があります。

さらに、これは東京都幼・小・中・高・心性教育研究会という、小学校の先生など性教育や障害者教育に関心のある人たちで続いている研究会の調査データです。ちょっと見にくいと思いますが、上のほうの赤いところは累積初潮年齢で、何%の人が初潮を経験したかという女の子の年齢、下の青が精通年齢です。男性の方と女性の方で生物的に違っていてもしょうがないのですけれども、女性の初潮は当然身体的なものだけで決まり、男性のほうは性的な興奮する度合いというのが精通年齢に影響しています。ここ10年の間に、男性の精通年齢が高まっています。つまり、性的に興奮する小学生、中学生の男子がだんだんと少なくなっている、という事態をあらわしています。

それを示しているのがその下の図で、性交願望、性的関係を持ちたいですかというふうなことを、何とこの研究会は1984年からずっと3年置きに調査をしているので、かなり信用のおけるデータなのです。私が若いころはもっと前ですけれども、1987年ぐらいの中3の男子は、9割近くの86%が性的関係を持ちたいと答えていました。しかし、2014年の調査で25.7%しかいなくなってしまった。女性ももともと低いですが、1987年に36%いたのが2014年では10%しかいなかった。

私は性行動に関する専門家ではないのですが、今、私の周辺の家族社会学者、青年社会学者、心理学者が、なぜここ10年の間に若者の間で男女交際意欲、性的意欲というものがここまで低下したのかということに関していろいろ調査、分析をしています。私も、いろいろほかの人が分析したのを読んでいますが、母親が専業主婦だと男の子は交際意欲がなくなるとか、そういうのが出ています。だから、親に反発してどうこうというのがなかなかなくなってきた、親とずっと仲がいいと。それは別に悪いことではないのですけれども、そのかわりに外に出て行ってという人が少なくなっているというのはまた事実です。それがいいか悪いかはともかくとして、若い人の間で性的関係を持ちたい、彼女彼氏をつくりたいという意欲が、ここ10年の間で大きく低下しているというのは1つ考えなければいけないと思っています。

その話というよりも、今日はこれから経済的な話を中心にしていきます。

絶食化と呼びましたけれども、草食系というのは異性と交際したいという欲求はあるけれども自信がないから声を掛けられない、でも寄って来れば交際したい、ということなのでしょう。しかし、そもそも異性と交際したいという意欲自体が若い人の中で低下しているみたいです。

インタビュー調査とかアンケート調査なんかをしますと、付き合うのは面倒、ほかに楽しいこと

がある。結婚しない相手と付き合うぐらいだったら時間の無駄だとか、男性はお金の無駄だとか、そういう形で低下しているというのが現状です。これが前振りです。ここからなぜ日本で結婚が少なくなったかというところをいろいろな経済的観点から見ていきたいと思います。

経済的視点から見た未婚化

結婚というのは2つの意味があって、1つは経済的に豊かな生活を送る。つまり、結婚すると新しい経済生活単位ができるということです。三世代家族だって、婿入りにしろ嫁入りにしろ、少なくとも一方の人にとっては経済生活が変わることを意味します。

2つ目は、好きな人と一緒に暮らすという側面がある。

戦後から1990年ごろまでは、この2つの側面が幸運にも一緒になっていた、両方叶えられた、という時代だったのです。つまり、男は主に仕事、女は主に家事で豊かな生活を築く、ということなことは可能だった。豊かな生活が何を意味するかというと、もちろん持ち家主義ではない人もいますが、十分に広い住宅、家電製品を揃え、家族でレジャーを楽しみ、子どもが大学に行きたいと言ったら十分な教育費を出せるような家族生活、これが戦後日本の中流生活のモデルだったわけです。それも、男性は主に仕事、女性は主に家事というのは、パート程度だったらそれをプラスアルファぐらい、ということで主に家事というふうな言葉をとりあえず使いました。

1980年代まで結婚が容易にできた理由というのは3つあります。経済的な心配はなかった、出会いが容易だった、恋愛への憧れがあった。恋愛に憧れて、好きな人と出会って、男が主に仕事、女が主に家事で豊かな生活をつくるのが可能な経済条件があった。その根本的な条件というのが、若年男性は正社員か自営業者の跡継ぎとして安定した収入が保証されていた、ということで一番大きいです。結婚に当たっての経済的な心配は不要だった。まず、男性の経済格差がなかったということが中流化、結婚を促進したわけです。それは、40、50歳になれば、大企業の役員になった人と中小企業で工員をやっていた人と差がつくかもしれませんが、少なくとも20代、30代ぐらいというのは大企業に勤める人であっても、自営業の人であってもそれほど収入に差はなく、格差といっても量的な格差で、豪邸を建てられるか小さいマンションになるか程度の差です。少なくとも、経済的に家もなく、家電製品もなく、子どもの教育費に困ってレジャーもできなくなる、なんていう中流生活ができなくなる不安を持って結婚した人はほとんどいなかった。もちろん、何かのリスクがあってそうなった人は多いと思いますが、大体の場合はそうだったのです。

つまり女性は、相手が誰でも男性で真面目に働きさえすれば、相手が中卒であろうが自営業であろうが何であろうが、結婚して真面目に生活していれば住宅、家電製品、レジャー、子どもの教育

ということに関して心配することはなかったわけです。

そして、男女交際には出会いと見合いがあった。私が「婚活」という言葉をつくらなければいけなかったのは、これがなくなったからです。恋愛結婚の半数は職場結婚で、インタビュー調査なんかをすると、女性は一般職であっても正社員だったわけです。そして、身近に未婚異性が多く、社内サークルがありましたし、特に大企業においては、労働組合というのがあって労働組合青年部なんて、未婚の男女が親しくなるような機会をたくさん提供してくれたわけです。つまり、ゆっくり相手と親しくなる時間的余裕があったのです。見合いに行っても、経済格差があまりないので、悪い人ではないからいいかなとかいう形で結婚していったわけです。

1980年代までは、多分恋愛への憧れが強かったです。欧米や日本のテレビ・ドラマで楽しい恋愛が描かれて、自分もそのような恋愛結婚ができるのではないかと期待していたのが1980年代までに育った若者たちの意識です。

私の母親はもう亡くなってしまいましたけれども、生きていたら80歳過ぎの私の親は見合い結婚で、夫婦の仲がよくなかったのは見合い結婚のせいだ、と見合いのせいにできたのです。1980年ぐらいまでの若者というのは、親は見合い結婚だから、こんな人と結婚してしまって、と母親から愚痴をこぼされて、あんたは理想的な人が来るまで待っていなさい、恋愛結婚しなさいねと応援されて、若い人たちは恋愛結婚したらラブラブの夫婦になれると信じることができました。当時、憧れだから親も見合い結婚だから自分も見合い結婚でいいか、という形で諦められたわけです。

しかし今は、昔ながらの結婚、自然に出会って、男性の収入で妻子を養うということはもはや多くの人にとって無理になってきた。ここが多分ポイントなのです。後で述べますが、今の日本社会では多様性とかリスクというものをすごく嫌うわけです。親世代だけではなくて若者もそうです。人から突出したりすると、すぐネットか何かで中傷、悪口、文句が来るわけで、私もそうですが、日本人は文句を言われることに対してすごく弱いので、男女交際しても隠して付き合っている学生は多くいます。知られると、何か裏でSNSで言われてしまうと嫌だからというので隠れてこそこそ付き合っています、と。そんなので楽しいの、と言ったら、うーんとか学生は答えていましたけれども。

格差があるということが大きいところなのです。格差があってはいけないと思っているところに格差ができてしまったので、それが結婚、出産に結びついていないというのが今の現実なのです。

それで、近年の未婚化の理由は先ほど言った①②③、つまり1990年ぐらいまでは、①結婚して経済的にやっていくことに対してほとんどの人が安心できた、②自然に出会いがあった、③恋愛への憧れがあったのが、それらが1990年から全て反転します。恋愛への憧れもなく、未婚の適当な異性

が周りにいないし、男が主に仕事、女が主に家事で豊かな生活を送る見通しが立たない若者が激増したことが、まず第一の理由です。

まず、経済不安をA、B、Cの3つに分解します。A、若者(特に男性)の経済力が低下した。もちろん女性も低下しているのですけれども、男性の間で低下したということだけではなく、格差がついたということが一番大きな理由です。アメリカ、ヨーロッパみたいに、みんな等しく貧乏になったらそれはまた別の問題なわけです。そうではなくて、正社員としてバリバリやれる若者とそうでない若者に、若い時分からもう既に格差がついて分解してしまっていて、生涯収入の見通しも大きく格差がついてしまった、ということが一番の原因です。

2番目は、B、男性が経済的に扶養するもの、という意識はまだまだ強いというか、欧米やアジアの国々に比べれば段違いです。結婚したら男性の収入で生活するのが普通、というのは親世代はもちろん子世代にも相当あり、若い人たちにも同じように考えている人が多い。

私が、「パラサイト・シングル」という言葉をつくってからもう20年ぐらい経つのですけれども、今年、少子化25年なのです。1.57ショックというのが厚生省から発表されてから、25年経ち、逆に欧米の人たちからは25年間政府は何をやっていたのだ、と言われることもあります。最近、アジアの人からいろいろ聞かれるのです。今、韓国、台湾、香港、シンガポールなどは日本以上の少子化ですけれども、少子化は始まったばかりなのです。日本みたいに20年間出生率が1.5以下であるという国は、イタリア、スペイン、ドイツ、ギリシャというところもそうですけれども、少なくとも日本が最先端を走っているわけです。向こうは、EUがあつてのみ込んでくれるのでまだいいのですが、日本は一つの国でやらなければいけないというので、アジアの国々の人たちは私のところに話を聞きに来て、日本みたいにならないにはどうしたらいいですか、と聞いてきます。

アジアと日本で共通するのは、この3番目の要因です。C、いわゆる親と同居して結婚しないで待てる。つまり、これが西ヨーロッパやアメリカとの最大の違いです。

後でも言いますが、西ヨーロッパやアメリカでは親から放り出されますので、一人で生活するよりも二人で生活したほうがはるかにいいわけです。日本でも高度成長期、今から40、50年前は、地方から東京に一人暮らしで出てきた人が多かったのですが、一人で生活するよりは二人で生活したほうがましだといってどんどん結婚していたのです。しかし今は、日本全体で男女とも18歳から35歳までの若者の8割は親と同居しています。一人暮らしの独身者は、東京はもう少し多いですが、地方では一人暮らしの独身男性や女性というのは珍しい存在です。正確に言えば、工場があるところとか、そういうところを除いた地方ではすごく少ないです。

これはアジアも一緒ですけれども、つまり、日本社会では親と同居して生活水準の低下を当面避

けることができる。独立したり、収入が低い人同士で結婚して生活水準が落ちるよりは、親と同居したままその生活水準を保ったほうがいい、というふうに思う人はそれは増えます。親と同居していつまでも待てます。

まず、経済不安からいきますと、若年男性の経済格差が拡大してきたのは大体 1990 年代半ばです。正社員として就職できない若者が増えてきます。未婚男性の 4 割は低収入の非正規雇用か無職です。つまり、一方で妻子を養える収入があり、家族手当や社会保険もあるような正社員の若い男性がいて、一方で収入が少なく雇用も不安定で、社会保険も加入できないような若年男性が出てくるとなると、それは今の男女の意識のシステムの中では、前者と結婚したいと思う女性が大部分で、後者と結婚したいと思う女性はあまりいなくなるわけです。

というようにすごく真っ当な話を、私は 20 年前からしているのですけれども、つい最近になるまで全く取り上げてもらえませんでした。

非正規雇用の増大

政府の税制調査会のレポートに、私の話プラスこういう図も載っているのですが、そこからデータを送ってもらって出したのですけれども、(レジュメ 23 頁グラフ)横軸一番左の 1 というところが 1995 年です。20 のところが 2014 年で昨年の数字です。25 歳から 34 歳までの男性で、1995 年には非正規雇用者はわずか 2.9%しかいなかったのです。それが、2000 年代に入ってから急増し、2014 年には 16.9%が非正規雇用になっている。

未婚者だけに限るとそれはもっと多いという図で、出生動向調査を再集計したものです。1992 年には 25 歳から 39 歳までの未婚男性のうち、8 割以上 9 割近くが正社員で、無職の人は 2、3%しかいなかった。しかし、2010 年の段階だと、未婚男性で正社員である者は 6 割を切りました。先ほどの数値と違うのではないかとというと、先ほどは既婚男性も含めるのです。つまり、正社員の人はどんどん結婚してしまうのでこちらの母数から除かれ、当然未婚男性の中で非正規社員率がどんどん煮詰まって高くなるのです。

2010 年の無職率も、例えば 35 から 39 歳までの男性で 12.9%、ほぼ 8 人に 1 人が無職なわけです。女性の状況はもっとひどいです。だからよく、男性の収入が少なくなったら女性が養えばいいではないかと言うかもしれませんが、養おうにも養えません。いくら男女雇用機会均等法があっても、非正規化の波に逆らえず未婚女性で正社員である者は大体 5 割を切るぐらいです。だから、若い人たちが一番避けたいのは非正規社員同士で結婚することなのです。

私が、全国消費実態調査のデータで動かして驚いたのは沖縄でした。沖縄でなぜ出生率が高

いか。沖縄は、非正規社員男性で結婚している人の割合がほかの都道府県に比べ、すごく高いのです。いろいろな意味があると思います。非正規社員男性と結婚しても恥ずかしくない、別に人に言える、という多様性の文化があるのかもしれませんが。沖縄以外のところだと、私今度結婚したの、相手は、と言ったら、派遣社員という、もしそれがいい人だったとしてもやはり周りに言えないのです。

東京はあまり関係ないですけども、私は地域の婚活支援というのをやっています。農家の嫁募集、というふうに地方の農村が打ったら誰も応募してこなかった。農業の共同経営者をやってみませんか、だと応募が来る。さらに、北海道のあるところは、牧場の共同経営者になりませんか、というふうになるとたくさん応募が来るとか、ネーミングは重要だと思いましたけれども。

ただ、もちろんだまして連れて来るわけではないので、現実には朝の3時、4時に起きて仕事を始めてというのはわかるのですけれども、農家の嫁に行きました、というよりも、私は牧場の経営者に嫁に行きました、というほうが周りに言えるではないですか。

だから、なかなか46都道府県では、正社員でないとなかなか周りに言えず、逆に沖縄だと別にみんながそうになってしまっているから言える。これもまたいいシナリオか悪いシナリオかわかりませんが、非正規社員男性と結婚するのは別に不思議ではないような文化ができてしまえば、また別の問題になります。ただ沖縄だけが外れ値というか、人口学的にいうとあらゆる面で特異なところなのです。

それで、日本ではまだまだ男性が経済的に扶養するものという意識は高いです。せめて子どもが小さいうちは自分の手で育てたい、と思っている女性は、女性男性も含めて若い人の中でまだまだ多数派です。結婚後、男性の収入で暮らすのが当然、という質問を未婚者にしたら、8割はイエスと答えました。それはわからなくもないわけです。

最近、2000年を境に若年女性の専業主婦志向が少しずつ強まってきて、例えば結婚後、ずっと専業主婦でいたいというのは2割で下げ止まったままです。逆に、男性で専業主婦を求めるという人の率はどんどん下がっていて、1割程度になってしまいました。つまり、専業主婦になりたいけれども結婚相手の男性は専業主婦なんか無理だと思っている、という組み合わせがすごく強まってきたのです。

ここでは述べませんが、日本は先進国のうち正社員男性だけではなく、正社員女性でも、未婚、既婚にかかわらず世界一の長時間労働です。私は去年、香港中文大学の客員教授として1年香港に行って香港の社会を見てきましたが、おもしろいのです。日系企業の銀行とか商社とかメーカーがたくさんあって、香港には700万の人口のうち約2万人の日本人がいます。いろいろ話を聞いたら、

香港の日系企業ではみんな夕方5時、6時には帰る。なぜなら、現地採用の香港の人はみんな5時、6時に帰ってしまうわけだから、日本人だけ7時、8時まで残っているのは変でしょう、そうですね、と。空いた時間は何をしているかと聞いたら、独身の人はレジャーに行くとか家族サービスするとか言っていますし、香港現地の人は1週間、2週間の夏休みとかバカンスをとるので、1週間、2週間いなくなるのが当たり前。では俺たちだってやってもいいではないか、と言って、日本から派遣されてきたエリートサラリーマン一家が1週間、2週間バカンスをとるわけです。こんな日本ではできないし、日本に帰ったらできないので帰りたくない、とみんな言います。だから、私は独身の人とか単身赴任の人とかと一緒に、いつも6時ぐらいから週に1度は食事会をやっていましたけれども、そういうのが当たり前なのです。

だけれども、日本に帰ってしまったらそれがもうできない。それは、男女かかわらず上司が帰るまでは帰れないとか、1週間や2週間など長期の休みがとれない。だから、半分ぐらいの人がそれをやってしまえばと思うのです。日本は同調圧力が強いですから、いくら法律的、人道的に正しくても、みんなと違うことをやっていると後ろ指を指されます。日本人は後ろ指を指されるのが嫌ですので、結局、長時間労働が甘受される。

先ほど、女性の非正規雇用率が高いと言いましたが、非正規雇用で年収50万とか100万の人が、結婚してから夫の収入に頼ろうと思うのはそれは当然です。私も非正規雇用の若者100人以上にインタビューしましたけれども、ほとんどの女性は、将来は、と言ったら、最近では年収が高いと言わないのですけれども、安定した男性と、と言います。だから最近、自衛隊婚活がすごい人気なのです。警官婚活もすごい人気で、海上自衛官は年3分の1が単身赴任ですから、亭主元気で留守がいい、というのが最近の若い人にとっても復活してきたようです。皆さんもご存じだと思いますが、非正規の公務員も多いわけです。自衛隊や警官の非正規はいませんから、自衛隊員や警官である以上、全員正規雇用者で、安心して婚活できるとかいうので人気が高いということです。

これが、夫は外で働き妻は家庭を守るべきである、という考え方についての賛否の調査結果なのですが、2002、2007、2012年、とにかく最近若い女性でこれに賛成する人が増えてきているというのがこのデータです。つまり、男は仕事、妻は家事、に反対だという人は、むしろ40代、50代の女性に多くなって、20代の女性は賛成する人が今増えてきています。

これは、結婚相手に望む年収というのを明治安田生活福祉研究所と私が共同して調査したものの図表で、いろいろなところに引用しています。お手元の資料を見ていただいたほうがいいと思いますけれども、青が男性で赤が女性、男性は6割はこだわらないと答えていますが、最近では男性でも年収200万以上、400万以上、600万以上でなければ、と答える人が増えてきています。

10 年ほど前に心理学者の小倉千加子先生とシンポジウムで一緒になったとき、医者で結婚するのだったら女性はどこ大学を出たらいいと思いますか、と聞かれたことがあるのです。それは音大かな、私の知り合いは宝塚出身の人と結婚したから宝塚音楽学校かな、お嬢さん女子大かな、とかいうふうに言っていたのですけれども、最近は胸を張って言えます。自分の娘を医者で結婚させたかったら、入れなくてはいけない大学はただ一つ、医学部です。最近は 3 分の 1 が医者同士で結婚しているのです。その上に、今、医大人気で、国立大学医学部の定員の半分近くが女性によって占められるようになりました。

皆さんは政治家ですから言わせていただきますと、私は、大学を出て議員になりたいという政治家の卵の人とちょっと会って話したときに、彼女にもう振られます、と言うのです。どうして、と言ったら、僕が一流大学を出て就職もせずに政治家を目指す、と言った途端に、何で一流大学を出て銀行でも商社でもそういうところに入れて生活できるのに、不安定なそれも看板、地盤がない中で政治家を目指すの、というふうに言われてもう振られてしまいます、と。もしかして経験のある人はいますか。ここら辺のエピソードを話すと、この話で 30 分、1 時間過ぎてしまうので、肝心なところに行きます。

男性はそういうふうに、収入はこだわらないと答えるのですけれども、女性でこだわらないと答えた人はわずか 20% です。女性の管理職比率というものも十数% です。東大入学者の女性比率も 20% で止まったままなのです。自立志向があって、一生仕事をやりたいというような若い女性の割合というのは、つまり男性の収入なんてどうでもいいというのは、学生に調査をしたときも大体 2 割ぐらいでした。相手の男性を好きになったら収入が低くても高くても構わない、と答える人は大体 2 割ぐらいで、5 人に 1 人です。5 人に 1 人しかいないのか、5 人に 1 人なのかはともかくとして、でも大多数は 200 万以上であればいい。全国ですので、東京で 200 万といたら低いですが、でも、地方で年収 200 万あるといたら結構威張れるのです。私も、農村地区のフリーター調査に行ったことがありますけれども、年収は 50 万ぐらいという男性はたくさんいました。

ある 30 代半ばの未婚女性に調査をして、相手の年収は大体どれぐらい以上だったらいいと思いますか、と聞いたら、指をずっと 1 本上げてきました。もしかしたら 1,000 万、と言ったら、うん、とかということで。自分が働かなくて中流生活を維持できる。つまり、今の若い男性で、自分の収入だけで持ち家を持てて、子どもを大学に行かせられるような収入を稼げる男性は、大体 1 割と踏んでいます。というような話をしたのにもかかわらず、8 年ぐらい前に私のところにゼミ生で初めて、私は大学を卒業したら専業主婦になりたいです、と堂々と言う女子学生があらわれました。この調査はまだなかったのですけれども、似たような調査があったのでそれを示しながら、私の授業

を聞いたのか、10人に1人しかいないのだぞ、と。東京でも年収600万円以上は未婚男性で3.6%しかいないのだぞ、と言ったら、彼女は、山田先生の授業には全て出てAを取った、と言うのです。どうして専業主婦になりたいの、と言うと、私はその10人に1人をつかまえる自信がある、と答えられました。そういう女性がこういう高収入の男性をつかまえてしまうので、黙っていたらそれは来ません、という話なのです。

このように収入の高い人がいいという人は、せめて400万、600万ですけれども、全国調査ですから、東京都内に比べれば低い数字が出ます。東京都は生活費が高いので、200万では暮らしていけないかもしれませんが、200万未満の未婚男性が38.6%、200万以上400万未満が36.3%、400万円以上が25.1%で未婚男性の4人に1人しかいないわけです。これが25年前と大きく変わったところです。

去年、イギリスでこの図（結婚相手に望む収入と現実の未婚男性の年収の比較）を見せながら発表したときに、イギリス人の研究者に、日本では本当にこんなにえげつない失礼な（rude）質問をするのか、とまず言われてしまいました。もしイギリス人女性がそういう質問をされたら、心の中ではそれは好きになった相手の収入が高いのに越したことはないけれども、収入で相手を選ぶなんて愛情ではないというふうに思うから、みんな大多数の人はこだわらないと答えるに違いない、というふうに言いました。私もそれほど好きな質問ではないのですけれども、2010年の段階で内閣府で調査をするときに、これを入れてと言ったらだめと言われたのです。そうしたら、2015年の調査で入ってしまいました。どうしてですか、と聞いたら、内閣府ももう背に腹はかえられなくなったらしい、このことを認めないと前に進まなくなったらしい、という話をしていました。

あと、もう一つは、こんなに確率が少ないというふうにわかっているけど、どうして未婚女性は収入が高い男性にこだわるのだ、というふうに言われたのです。私は女性ではないのでなかなか心理がわからなかったのですが、この前、私が解説を書いた石田衣良さんの「コンカツ？」という小説の中に答えが書いてありました。確率が少ないのに宝くじを買ってしまうのはなぜか。宝くじは、絶対当たらないと思いながら何千円、何万円かける人もいるではないですか。当たる可能性はゼロではないのです。当たったときに自分が幸せになるというのが約束されている、これに人間は弱い。私の知り合いにもいましたが、宝くじを買う人は、当たったら1,000万は何々さんにあげて、2,000万は親にあげて、というふうに、あげる先を考えるのが楽しみで楽しみで、というらしいです。こんなに優しい私だからきっと当たるに違いない、と思いながら宝くじを買うのです。

想像できるではありませんか。収入の高い男性と結婚したら、こういう生活ができて子どもを育

てながら、子どもを育て終わったら夫婦で世界一周旅行したいな、というような生活を想像しやすいというか、親はそういう生活をしてきたのです。親の世代はみんな年収がこの辺の人たちと結婚して、主婦なりパートなりでやっていって家も持てた。だから、自分もできないはずはない、自分が働かなくてもそういう男性がいらないはずはないだろう、というふうに思うのは自然といえば自然です。

確率が少ないといっても、やはり自分の友達や姉妹、というのが最悪です。私もいろいろ調査しましたがけれども、姉妹のうち1人が収入が高くて優しい男性と結婚してしまうと、もう一人の姉妹がなかなか結婚できなくなる。姉妹でもそうですし、大学の同級生とか同じ会社に勤める人たちが、中身はどうなったかは知りませんが、少なくとも世間的にいいと思われる男性と結婚してしまうと、私と容姿も学歴も対して変わらないような何々さんがこんなにもいい結婚ができたのだから、私に結婚できないはずはない、と思うのです。これも人間心理だからしょうがありません。

私がフリーターの人にインタビューしたとき、突然、私は今までくじに当たったことがない、という話を延々とし始めました。これはどこに落ちるのかな、というふうに思ったら、何にも当たったことがない、だから男には当たるに違いない、と信じているわけです。だから、笑いというよりも悲しくなってしまいます。逆に今そこにしか出口がない。フリーターで非正規雇用ですから、今さら自立しろと言ったって、今の日本のシステムだと、5年10年フリーターをしている女性を正社員として雇うというところはなかなかないわけです。となると、彼女たちはこういう確率は低いとしても、こちらのほうにかける以外になくなってしまっているというのが現状なのです。

これも財務省の税制調査会のレポートですので、もし関心がある方はみんなそちらを見ていただいたらいいと思います。男性が年収300万を切ると、既婚率がぐんと下がるのが現実です。

パラサイト・シングルの増大

3番目の未婚化の理由がちょっと言いましたが、親と同居していつまでも待てる。女性は収入の高い男性があらわれるのを待つし、男性は自分の収入でもオーケーと言ってくれる女性を待つ、というような形になっているわけです。特に、1980年代からいわゆる親同居未婚者が急増してきます。1980年ぐらいまでは、地方から東京に流れ込んで一人暮らしをする男性も女性も多かったのです。ここ10年ぐらいの間、移動率が徐々に低下しています。

高度成長期のころの団塊世代は兄弟4人で、地方には1人2人残っても、都会に出てくるという人が多かったです。でも、今は地方でも子どもは2人ですから、なかなか移動が少なくなったというのは、一人暮らしが少なくなっているということです。だけれども、生活満足度は高い。結局親

と同居しているので、当面は生活水準が高いのです。年収は 50 万であろうが 100 万であろうが、普通の生活をしている親と同居している限り生活はできるわけです。

私は、10 年近く前にフランス訪問団の人からヒアリングを受けたとき、日本の若者の年収額を答えたら、それは少ないですね、と言われたのです。日本の若い人というのは収入が少ないし、何で日本ではそんな低収入の年収 100 万、200 万の若者が何百万人いるのに、暴動やデモは起こらないのですか、というふうに言われました。なので、フランスとは違って、日本は国や政府にかわって親が社会福祉をしています、と。親が低収入の若い人たちを住まわせて、衣食の提供をして、家事まで全部やってくれています。それで、時々フランスに行ってエルメスとか買ってきますよ、と言ったら、メルシー、とかいうふうに言っていましたけれども、最近そういう人も少なくなってきた気がします。

もう経済的には、戦後家族モデルは限界に達している。男は主に仕事、女は主に家事で豊かな生活を築く、というのは限界です。若者が経済的に弱者化しているというのは、欧米や東アジアも一緒なのですけれども、欧米は戦後家族モデルから転換した。つまり、親から離れているので、同棲でも、女性が働いて男性を養う形でもどんな形でもオーケー、というような形になったのです。けれども、日本は、結婚して豊かな生活をつくれないうなら、もっと正確に言えば下降移動、自分の親の水準から落ちるぐらいだったら、自分の親ぐらいの生活ができないのだったら、結婚しないで親と同居していたほうがまし、と男性は諦めて、女性は待つ。

今、非正規雇用が増えているだけではなくて、自営業が規制緩和によって成り立たなくなっているわけです。だから、私は学生に、昔は規制があったので、たばこ屋さんとか酒屋さんとかが成り立ったのだよ、と言います。もう 70 年前ですが、昔は母子家庭の福祉、特に戦災で夫を失った母子家庭の人たちの福祉として、たばこ屋さんや緑のおばさん（学童擁護員）がいたのです。私も東京都の何々区の出身ですが、自治体は緑のおばさんを正規雇用で雇っていました。緑のおばさんは母子家庭の方が多かったという話を聞きます。公務員として雇って、男性のように収入は増えないけれども、安定した仕事というものが自営業や公務員でかつては大量にありました。そこに母子家庭がはまっていたのです。現在は規制緩和をしたのはいいのだけれども、規制緩和前の自営業をセーフティーネットとしていた人たちが全部放り出されてしまっている。本人たちはいいけれども、その跡を継ぐ予定だった人たちが大変で、魚屋さんとか、うちの近所も豆腐屋さんが次から次へと潰れていくわけです。

出会いの減少

自然な出会いは減少しています。これも非正規化が進んだからだだと思います。正社員が昔に比べて長時間労働をしているというのは確かだと思います。若年正社員の労働時間は増えていますから、仕事が忙しくて彼氏彼女をつくる余裕がないという人の意見もわかります。それで、非正規化が進むと入れ替わりが激しくて正社員との交流がなく、特に日本の男性は口下手というか積極的に動かないので、親しくなるまで、声を掛けていいようになるまで時間がかかるのです。

欧米の人はすぐ話しかけて、気に入ったらデートに誘いますが、日本の男性は、学生を見ているもほとんどそういうのはなく、時間をかけて接触させないとなかなか交際が始まりません。それで、非正規雇用は入れ替わりが激しくて、大多数のシャイな日本人男性にとっては非正規化というのは出会いの機会が減少するわけです。

全員加入の若者組織、社内サークルとか青年団とか先ほど言った労働組合青年部とか、私のゼミ生の女性がある私鉄に就職したら、すぐ労働組合の役員をやれと言われて役員をやって、そこで親しくなった人と付き合ってもう結婚だ、とか言っていますから、まだあるところはいいのですけれども。結婚対策のために組織率を上げろということはできませんが、組織率が低くなったことは出会いの機会を減らしています。そもそも、非正規社員は本当に職場と家の往復です。それで、経済的に釣り合った男性が身近にいないのです。

見合いを復活させろと言うのですが、これこそ現実を知らない意見です。大妻女子大学の小澤先生が、見合い世話人の研究をしているのですけれども、いい男の人を紹介してくれと言われて契約社員の人を紹介したら、その家から絶交された。これは東京ではなくて地方ですけれども、何でうちに正社員ではなくて非正規の人を紹介するのだ、とそれ以来もう口をきいてくれなくなった。

あるところに釣書を持って行ったら、会社四季報を持って母、娘が待っていた。何人か、どうですか、と言ったら、これは子会社だからだめ、と。そんなことをしていたら誰もいなくなるでしょうとかいう話なのですけれども、そういうことです。

そもそも日本人が社交が苦手というのは、偶然の出会いがすごく少ないことに結びつくのです。

私は今 60 歳ぐらいですが、恋愛の憧れが消失したというのは、我々世代の恋愛結婚したはずの親がラブラブではない。私が 20 年前にアメリカに留学したとき、アメリカでは本当に毎日夫婦はキスをしてアイラブユーと言っているのか、というふうに何人かの学生に聞いたことがあります。そうしたら、当然だ、と言うのです。もし、お父さんとお母さんがキスしなくなったら、子どもは離婚を覚悟しなければいけない。1 週間アイラブユーと言わなかったら、もうお父さんとお母さんは離婚するから僕たちはどうしよう、と考えなければいけない事態になります。なので、その恐怖を味

あわせないためにも親はキスしなければいけない。これは冗談ですが。

香港でもやたら中高年の夫婦が腕組んだり手をつないだりして、電車の中でもいちゃいちゃしているのです。香港はイギリス文化が強いところですから、欧米文化を引き継いだのですが、いちゃいちゃするのは若い人だけではなくて、中高年の人も公園なんかで夫婦が寄り添っています。

私の知り合いで、仲がいい60過ぎの夫婦がいるのですけれども、先生、私たち手をつないで歩いていると不倫と間違えられるのよ、と言われたし、子どもは小さいころはよかったのだけれども物心がつくと、お父さん、お母さん、僕たちの前でいちゃいちゃするのはやめてくれない、と。子どもの前でも抱き合ってキスとかをしていたらしいです。

それが無いので、どうも恋愛結婚して夫婦になったとしても楽しくなさそうだ、ということで、恋愛してもずっとラブラブが続くのでなかったら頼れるのはお金、と思うのもわからなくもない。それで、先ほども言いましたが、恋愛ではなかなか声をかけなくなる。

結局、最近は結婚だけではなくて、子育てにお金がかかるから子どもを理想の数まで産まない。多分これは東アジアに共通の要因だと思います。韓国や香港、シンガポール、台湾も少子化に悩んでいます。日本以上に子どもにお金をかける儒教文化圏というのがあるのでしょうか。つまり、子どももプレッシャーなわけです。親以上に出世しなければいけないというプレッシャーがすごく子どもにも強いし、親も子どもは自分たちよりもいい学校に行ってほしいというプレッシャーをかけるから、子どもの数を絞らざるを得ないし、ひきこもりがあるのは日本と韓国ぐらいなのです。

親よりも上の学校に行かなければ人生失敗だと思うような、つまり子どもに対するプレッシャーが強いのです。だから、男の子に多いというのはそうです。まだ、今の親世代は女性の学歴は低いので、娘へのプレッシャーというのはかかりにくいですが、今から20年後、30年後は娘へのプレッシャーがかかってしまうかもしれない。

セックスレスも増えていて、それは子どもが生まれないなという感じです。

欧米諸国と日本の違い

最初に言いましたが、男は主に仕事、女は主に家事、というのを期待しているのでは不可能な時代です。ですが、日本と欧米で対応が違うのは、欧米では好きな人と一緒に暮らすことを優先して恋愛を活性化し、同棲や婚外子が一般化する、それで少子化が回復しているのです。それは、女性も職場に進出して、政府が下支えするので共働きが当然視され、さらに政府が若者にたくさん経済支援をするので、経済的には大丈夫だから何とかするから子どもを産め、というふうに言っているわけです。欧米の若者はパラサイト・シングルではないので、成人すると男女とも独立を求め

られます。他人と一緒に暮らさなければ生活できません。だから同棲が増えます。同棲しているうちに子どもが生まれます。欧米ではシェアハウスは一般的で、シェアハウスで異性と知り合う機会は増えます。

私は、アメリカ低収入者の生活の本を読んでいて、次のフレーズでびっくりしました。独身は高収入者のぜいたく品、特にアメリカの大都市で一人暮らしをするなんて独身高収入者のぜいたく品、ということです。つまり、早く同棲相手を見つけないと家賃なんて払えっこない、というのがアメリカの現実です。

アメリカは移民のせいで子どもが多いと言いますが、アメリカのいわゆるヨーロッパ系の人でも合計特殊出生率は1.8あるのです。もちろんスペイン系の人結構高いですけども、ヨーロッパ系の人、アジア系の人、アフリカ系の人でも1.8以上あるので、全然低くないのです。

それで、欧米の若者は収入が低くてもパートナーを得て、出産、子育てに手厚い公的支援があるから、経済的に不安定でも子育てが可能で、かつパラサイトでないということは子どもを義務教育まで育てればいいわけです。ヨーロッパは公費負担が多いです。これは問題だと思いますけれども、イギリスやアメリカは奨学金を本人が何百万円も借りるのです。今度サブプライムローンが起これば、教育費ローンでアメリカの銀行が潰れるのではないかといううわさはあります。ただ、アメリカはすごい学歴格差が強く、高卒と大卒では初任給が1.5倍とか、大卒と大学院卒では初任給が倍違うとかそれだけありますから、うまく職にありつきさえすれば奨学金を返すなんて簡単なのです。けれども、今はアメリカでも格差がありますから、大学院を出て順調に弁護士事務所に就職して、25歳ぐらいのときに年収が2,000万、3,000万で奨学金なんか返せるという人もいれば、なかなか就職できなくて奨学金破綻してしまう人も出ているという感じです。本当にリスクなことですが、少なくとも親は子どもの大学の学費を出さない。出す人もいますが、出さなくても子どもは自分で奨学金を背負う。ヨーロッパは公費負担で親は出す必要がない。

だから、子どもは高校まで育てればいいのだったら、3人でも4人でも楽です。大学の学費が全てゼロだったら3人4人産んでいいという人は日本でも多いと思います。といって、その学費で暮らしている私はどうなのだというふうについていわれるので、大学の先生が、ここになるとちょっと口が重くなるのというのはわかるのです。

日本は、逆に経済生活を優先して、好きな人と一緒に暮らすのは二の次。収入不安定層は、先ほど言ったように恋人をつくることさえも諦め、結婚も諦め、女性では安定収入男性をめぐる争奪戦が繰り返されているというのが今の状況です。

恋愛感情はどこに行くのだ、というのが実は私の今の関心で、寂しくないのです。8割が親と同

居していますから、家に帰れば自分を大切にしてくれる親がいるわけです。同性の友人たちもいたり、一人暮らしの女性で自立している人は、私の知り合いではほとんどペットを飼っています。私は「家族ペット」という本も出しましたがけれども、ペットは裏切りませんから、というふうに答えた人もいます。彼は裏切るけれどもペットは裏切らない。

それで、ロマンチックな感情とか性欲が少なくなっているのはそうですが、今、私は中年独身の人たちはどうなるか、ということに研究の関心があります。なので、経済的に恵まれている一流大学を出た 40 代半ばのキャリアウーマン(一人暮らしの女性、ペットなし)に話したら、あるアイドルが好きで毎日暇があるときはアイドルの何々君のことを考えている、と言うのです。アイドルグッズで埋めていて、その人のことを考えたりビデオで見ると胸がキュンとなる、と。もう 40 代半ばなので息子みたいなのです。

いろいろアイドルを変えていて、今は〇〇の何々君で、息子みたいにかわいい、コンサートに行くときに成功するかどうか心配でならない、とかいうふうに言っていました。

男性は、AKB、恋愛パソコンゲーム、ネット恋愛、アニメ萌え、それから一時的な関係を買います。メイドカフェ、JK 散歩、キャバクラ、性風俗、というのは面倒がなくて確実にオーケーがもらえますから。

とうとう、日本のメイドカフェがクールジャパンで香港にも輸出されて、私は調査に行ってきましたが、日本のメイドカフェとは違いました。単にこういう格好をしている人たちが出てくるだけで、日本みたいに何か萌えるために行くとか、特定の何々ちゃんに会いに行く、という感じはしませんでした。メイドカフェとかコスプレとかが香港にも輸出されているので、また今度、冬場に調査に行くつもりです。

未婚化社会の将来

先ほど言ったように、25%は生涯未婚、25%は一度は離婚です。だから、今問題になっているのは中年親同居未婚者です。私は読売新聞人生案内の回答者をしているのですが、そこでも最近、中高年の息子、娘が同居しているのだけれどもどうしたらいいか、というような 70 代、80 代の親の相談が増えています。相談ですから、社会学者とかが制度を変えろというふうに言ってもしょうがないわけです。私は社会学者ですから、こういうふうに制度を構築するべきだ、矛盾があるから変えろ、というふうには口では言いますが、個々の相談をしている人にとっては制度が変わるまで待ってられません。なので、どうしたらいいかというのは本当に答えにくいです。

今、中高年の親同居未婚者は 305 万人、16%ですから、35 歳から 44 歳までの 6 人に 1 人は親と

同居している未婚者なわけですが、1割が失業者、2、3割は非正規となっています。地方にいと見えるので、問題化するのです。それで、婚活対策とかも結構されるようになってきました。

東京と大阪、あと沖縄は婚活対策が存在しない、その1都1府1県は婚活対策を全くやっていません。周りを見れば結婚して交際している人がいるな、というのですけれども、実を言うと見えただけで、都内には親と同居したまま未婚の人たちが山のようにいるのです。その人たちがどうなるかという、現在孤立死が年3万人程度なのですから、大体80歳の生涯未婚率ですから、家族がなくて高齢を迎える人が2040年には年30万人以上あって、東京都でも4、5万人はそうなるでしょう。

今、病院に登録して自分の体を解剖してもらって臓器が激増しているのです。激増というほどでもないですが。昔は、臓器に登録していたとしても、家族の反対とかで解剖できないことがあったのですが、最近は臓器の会に登録する高齢者がどんどん増えていて、余ってしまって病院は困っています。なぜかという、臓器をすると埋葬してくれるのです。最後に自分が大学病院に行って臓器をすると解剖されて、最後に自分は医学の役に立った上にお葬式を出してくれて、引き取り手がない場合は病院のところにちゃんと納骨までしてくれます。このように、家族がなくて高齢を迎える人が増えているわけです。

だから、結婚支援の課題というのはいろいろありますけれども、経済力、コミュニケーション力、見た目に自信がない男性が増えている。増えているというのは、昔はコミュニケーション力や見た目に自信がない男性がいても、経済力があつたから結婚できていたのですけれども、経済力がない人が増えている。

最後の付録のところですが、結局、階級社会化というものが少子化をもたらした、いわゆる世代的な階層移動の可能性に今若者は直面しているのです。つまり、親は中流生活できるけれども、子どもは下手するとそこから転落してしまう、というような状況に若者は直面しています。それを回避するために、親と同居したまま収入の高い人を待ったり、このまま子どもに迷惑をかけないように独身のままでいる。それで子どもを少なくして生活水準の低下を避けるのです。

少子化がとまるシナリオには2つ、社会民主主義型とアメリカ型があります。1つは、北欧諸国やフランス、オランダでやっているように、経済格差拡大を若い人に対して反転させる。若い人全員が誰でも結婚すれば家を持って子どもを大学に行かせられる、という安心感を持たせるのが1つです。

スウェーデンは住宅保障もあり、非正規であろうと失業中であろうと、結婚した若い人に住宅が優先的に割り当てられますから、それを目当てに結婚、同棲する人も増えます。それで、スウェー

デンは2.0 ぐらいまで出生率が回復したわけです。つまり、今拡大している若者の経済格差を反転して縮小させる。

もう1つはアメリカ型で、下降移動を避けるための少子化だったら、最初から下層の人が多ければ、アメリカのようにそもそも住宅を持ったり子どもを大学に入れることを諦める層というものが増えてくれば、つまり階級社会化が完成して親世代まで全部階級化が完成してしまえば、アメリカのように少子化はとまるでしょう。アメリカは、中流以上の人は中流以上の人で結婚していい生活をして、下層の人は下層同士の人で結婚して楽しみながら生活をしていく。その場で楽しんで、上昇志向を持たないまま結婚して子どもを持っていくというような、下層は下層で再生産、中流は中流で再生産という階級社会なので子どもの数は多いわけです。

私は①(社会民主主義型)になることを望みますが、このまま行くと、②(アメリカ型)になってしまいかもしれないと懸念しております。

どうもありがとうございました。

〔質疑応答〕

【質問】 本日はありがとうございました。

私は32歳で、ある意味この当事者の世代でもあるのですが、その世代から見ると100%近くが同世代で結婚していたというそういう社会のほうが何か気持ち悪いなと思っていて、それを今日の1980年代ぐらいまでの話を聞いて、こういうことだったのだなとすごく腑に落ちた気がしています。

これからの話のことでいくつか伺いたいのですが、出会いの場がないというのが結婚に至らない一番の原因だというアンケート調査を紹介されていましたが、私はこれを見るたび本当なのかなとすごく不思議に思うのです。レジュメ10頁のそもそも出会いの場がない、という回答が確かに一番多いのですが、その下の、自分には魅力がないのではと思う、とか、恋愛感情を抱くことができるか不安、とか他の4項目に比べて、明らかに一番上が一番角が立たない回答なわけです。アンケートのときに、何となくこれが選ばれている部分があるのではないかというのをずっと疑問に思っているのです。

なので、当事者のアンケート調査というよりは、もう少し客観的なエビデンスとして、出会いの場が減ってきているというのが何かあれば教えていただきたいと思うのが1つ。

それからもう一つが、一番最後のところ、少子化がとまる2つのシナリオの2番、階級社会化の完成というところで、これはぱっと見、かなり刺激的なことが書いてあるようであり、私はこれはもう少しで完成するのではないかなというような気がしています。先ほどの沖縄の話にしても、医

者と結婚するなら医学部に入れろ、という話にしても、多分これに近いのだと思うのです。

そこまで至らないにしても、例えば高卒の方が結婚している相手は高卒が多いのではないかと、大卒の方はほとんど大卒と結婚しているのではないかとというような気もするのです。その辺のエビデンスがあれば教えていただきたいと思います。

それから、仮にそうだとすると、ここの完成に至る最後の一步というのは、未婚の女性の親が、娘が非正規の男性を連れて来たときに、非正規だけれども一生未婚よりはいいか、とって認めるようになる、もしくは娘がそれに抵抗を感じなくなる。ここが最後の一步として残っているだけであって、実はもうすぐこれは完成するのではないかなという気も話を聞いていて感じたのですが、そのあたりのご見解をいただければと思います。

【回答】最初のほうに関しては、エビデンスというふうに言われましたけれども、今私が知っている限りでは、家計経済研究所が未婚者の交際関係調査というのをパネル調査でやっていますので、それが出てくる可能性はあります。

あとは、昔どうだったかというのは、調査し直すことができないのでエビデンスとしては今こういう回答をしているということ以外はなかなかないです。ただ、もちろん周りにこんなに未婚の異性がいるのですから、自分が結婚を思えるような相手との出会いがない、というふうに解釈するのが妥当かなという気がします。

2番目の階級社会化。最近、仁藤夢乃さんの「難民高校生」や鈴木大介さんの「最貧困女子」というような、いわゆる下層社会に関するルポルタージュが出てきています。親が40代ぐらいで、中流の経済生活ができていない家庭の子どもが10代、20代に達している、という貧困の連鎖が今起きているような気がします。だから、あと10年、20年経ってこのままだと。

私は20年前に1年アメリカにいました。いろいろな区がありますけれども、本当に金持ちだけが住む地区と貧しい人だけが住む地区、というふうにゲートで区切られて分かれているようなところを私は現に見てきましたので、そういうふうになったら嫌だなとは思っております。

【質問】先生、楽しい話をどうもありがとうございました。

先ほどと同じような意見になってしまうかもしれないですけども、私も8頁のデータの読み方がどうかと思ったのです。

僕はちょうど1999年に大学を出ているのですけれども、8頁のグラフだと、そのころから2005年ぐらいのころが一番、性交経験率が高い大学男子である。1980年代とかのころは、今よりももっと絶食化、草食化しているのではないかと、というふうにしか見えないと感じるころです。

最近、何で結婚しないのかとか子どもができないのかというのは、やはり多様化しているのではない、というのは勝手に感じるころなのです。これは、いわゆる先進国化したから、子どもをつくるという本能的な要素が大分削られてしまったよね、というところですよ。だけれども、今ヨーロッパでフランスなんかはすごい出生率を上げたということが言われているわけですから、まだ日本も政策的な何かを展開できるのではないかなと思ったりするのです。そのあたりはいかがでしょうか。

【回答】データから見ると、多分、1980年代で現実に性交経験者はまだ低かった、だけれども憧れは強かったのだと思います。それが今は逆転している、と。性体験者はそれなりに高まってきたけれども、憧れのほうが低下しているというふうに我々は解釈しています。

日本は意識的な多様化、というのがなかなかされていないから、少子化が起きているのかもしれない、というふうに私は見解を持っています。

【質問】一番初めの質問ともかぶるのですが、本当に今、経済のお話から自信がないだろうというお話もあったのですが、私は今ちょうど30歳です。本当に同じ方たちも多いかなと思うのですが、これは、コミュニケーションだとかそういう関心がないという方がすごい増えているだろう、とこういう結果も出ている中で、関心のない方に対して無理やりというのもそれはできないと思うのです。

これは本当に私見でよろしいのですけれども、どういったことをやれば効果が出るかというのは先生の中でお考えというのはあるのでしょうか。

【回答】1つ、日本人は親も若い人もリスクが嫌いなので、私はどちらかというと今はとにかく交際とか性関係が怖い怖いというふうに教え過ぎているような気がします。よく、行き過ぎた性教育というのは逆のことを言うことが多いのですけれども、逆に行き過ぎた性教育で、性関係を持った恋人になったらストーカーされたりとか怖いことばかりある、というふうに教えられてきているのです。もちろん、そういうのに気をつけるのは当然なのですが、恋愛したら楽しいぞ、というモデル、見本を大人たちが見せなければいけないような気もします。というぐらいしかないです。私見です。

